

橋本佳延主任研究員

草原という言葉を聞くと、海
外の広大な牧草地や高原など、
少し遠い地域の風景を想像する
人が多いかもしれません。しか
し、身近な場所にも広大な草原
があります。その一つが六甲山
地にある、神戸市と芦屋市の境
に位置する東お多福山の山頂に
広がるススキとネザサの混生す
る草原です。

戦前の東お多福山草原は82・
9畝もの大面積で広がり、主に
ススキが優占する植物が豊かな
環境で、六甲山地のハイキング
の王道として紹介されるほど有
名でした。この姿は、人々が農



業や生活のために草を毎年刈り
取ることで保たれていました。

ところが1970年代までに
生活様式が変化し、草が刈り取
られなくなると、ススキよりも
ネザサの割合が大幅に増加、樹
木も生い茂って多くの場所が森
林に変わっていきました。その
結果、東お多福山草原の面積は
2007年時点で9・2畝にま
で縮小してしまいました。また、
ネザサは草丈が2倍以上に育
ち、マット状に広がるため、他
の植物を覆って日の光を遮って
しまうため、さまざまな草原生
植物が個体数を大幅に減らして

草原の刈り取りは多くのボラ
ンティアの協力で成り立つ。
1回の活動で30〜50人が参加
し、年間6〜7回に分けて約
2畝を刈り取る。いずれも東
お多福山草原



しまいました。つまり、戦後約
60年間で東お多福山草原の生物
多様性は大きく損なわれた状態
となってしまったのです。



刈り取り活動で数を増やしつ
つあるリンドウ。10月後半が見頃

く抑えられ、ニオイタチツボス
ミレ、オカトラノオ、ササユリ、
ツリガネニンジン、シラヤマギ
ク、リンドウなどの草原生植物
が多数見られる状態にまで回復
しています。これらを楽しみに
訪れるハイカーも多くなってい
ます。

06年度に兵庫県神戸県民局
(現・神戸県民センター)が主
催した六甲山系里山研究会でこ
の危機が伝えられると、六甲山
地で活動する市民団体がこれに
応じ、県民局をはじめとする行
政機関（環境省、神戸市、芦屋
市）と共に、草原の生物多様性
を取り戻すための刈り取り活動
をはじめました。17年間で市民
と行政の協働の輪は広がり、現
在では約2畝の範囲でススキの
割合が増加、ネザサの草丈も低

このような活動は多くのボラ
ンティアが支えています。しか
し近年、ボランティアの高齢化
が進み、こなせる活動量が低下
しています。また定年延長、年
金受給年齢引き上げ、女性の就
労率向上など社会構造の変化に
より、新たな協力者が得にくく
なっており、活動の持続性が危
ふまれています。これから東
お多福山草原を良好に保つため
には、刈り取り活動を高齢のボ
ランティアだけに頼るのではな
く、行政がより積極的に参画す
ることや、現役世代が参加しや
すい環境を整えることが強く求
められると思われます。

ひとはく 研究員 だより

六甲山地・東お多福山

ススキ草原、守るには